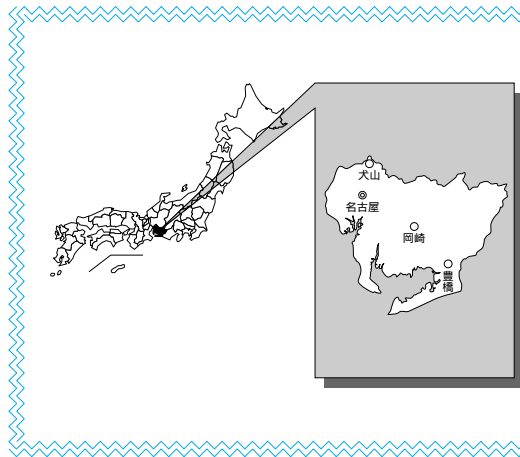


土木紀行

松重閘門

愛知県名古屋市



まつしげこうもん 松重閘門と堀川・中川運河の歴史

現在の堀川は、名古屋市内を流れる庄内川水系の一級河川ですが、その起源は物資の輸送や船舶の移動のために人工的につくられた水路、つまり運河としてつくられたものです。

名古屋の町は、慶長15（1610）年、徳川家康により名古屋台地の北西端に名古屋城が築城され、清須から町ぐるみで移転、いわゆる「清須越し」により誕生しました。

しかし、名古屋城下町は、内陸部に位置したため、船運による物資の運搬ができませんでした。そこで、名古屋城下町に物資運搬ができるよう、名古屋城の築城と同時期、慶長15年に福島左衛門大夫正則によって、当時海と面していた熱田（宮の渡し）と名古屋城下を結ぶ運河として堀川が開設されました。堀川は、物流の要として人々の暮らしを支え、名古屋城下の発展の礎となっていました。

その後、名古屋市（明治22（1889）年市制施行）は、第一次大戦（大正3～7（1914～1918）年）を契機に工業都市化が進み、物資輸送を堀川だけで対応することが困難となりました。

そこで、名古屋市域と名古屋港を結ぶ舟運の強化を図るため、河川であった中川を名古屋港と笹島貨物駅間をつなぐ運河として開削する構想が生まれ、名古屋市都市計画事業の一環として中川運河が昭和5（1930）年に整備されました。



また、堀川と中川運河を結ぶため、松重閘門が築造され、堀川からだけではなく、堀川から松重閘門を通じて中川運河に渡る名古屋港へのルートが確保されました。

中川運河の整備により名古屋市域へより多くの物資の運搬が可能となり、「東洋一の大河」として名古屋の経済発展に寄与しました。

松重閘門の役割

松重閘門は、堀川と中川運河を結ぶ閘門として昭和5年に築造されました。中川運河は、潮の干満に影響されない閘門式運河でした。中川運河よりも堀川の水位が高いため、この水位を調整するために松重閘門は築造されました。水路の両側に



写真 1 松重閘門



写真 3 ライトアップ



写真 2 塔の頂上部分

は、2基1組の棟が建っており、水門を開閉するための錘を収納しています。水門を開閉し、区画（閘室）の水量調節により船を昇降させることで運河内外の行き来を可能にしました。

昭和40年代になると道路網の充実やコンテナ船の増大により水運利用は減少し、昭和43（1968）年に閉鎖されその役目を終えました。

松重閘門は、名古屋市役所建築課の藤井信武によって設計され、中世ヨーロッパの城を思わせる装飾性の強い優れた外観となっています。

閉鎖後は取り壊される予定でしたが、地元住民の反対で保存されることになり、現在は、「松重閘門公園」の一部として整備されています。また

昭和61（1986）年名古屋市指定有形文化財，平成5（1993）年名古屋市都市景観重要建築物，平成22（2010）年度土木学会選奨土木遺産に認定され，装飾性の強い優れた外観は夜間のライトアップにより地域の景観を一層引き立てています。

《松重閘門概要》

- ・竣 工：昭和5（1930）年
- ・所在地：愛知県名古屋市中川区山王
- ・設計者：藤井信武（名古屋市建設課）
- ・構 造：鉄骨鉄筋コンクリート造
- ・仕 上：人造石塗り洗出し，一部花崗岩張